

ケネス1世によるアルバ連合王国の創設

The Foundation of the United Kingdom of Alba by Kenneth I

川 瀬 進

分野：経済史：スコットランド経済史 332.332

キーワード：スコットランド、DNA、カレドニア (Caledonia)、アルバ (Alba)、封建制度 (feudalism)、ヒエラルキー (hierarchy：階層制度)、コミュニティ (community：共同社会)、スキタイ人 (the Scythia)、モンズ＝グラウピウスの戦い、カムリ (Cymry：現ウェイルズ)、コーマック礼拝堂

目 次

- I はじめに
- II ピクトランド
- III カレドニア
- IV アルバ連合王国
- V おわりに

I はじめに

グレート＝ブリテン (Great Britain) の北部3分の1の地域を占めるスコットランド¹⁾。

地誌的にみてイングランドより極寒で、険峻な山々が繋がっているスコットランド。

そのスコットランドでの主な収入源は、原発と北海油田である。商業都市のグラスゴー、政治の中心地であるエディンバラで就労する以外は、高収入を得るチャンスがない。

イングランドよりも就労するチャンスが少ない。

何かにつけて、イングランドと比較されるスコットランド。

そのことは、対イングランド的な感情に結び付いた。

その対イングランド的な感情、すなわちスコットランド人の民族愛は、イ

ングランドよりも劣らず、それ以上かもしれない。

それは、2014年9月18日に実施されたスコットランドの独立を問う住民選挙からもわかる²⁾。

また、その民族愛は、スコットランドで、現時点でも、流通されている1パンド紙幣の存在からもわかる。

では、そのスコットランドでの民族愛は、いつから生まれたのであろうか。

それは、スコットランドの地誌、スコットランド民族の形成、スコットランド王国 (Kingdom of Scotland) の創設、ヨリ具体的に言うと、アルバ連合王国 (the United of Kingdom of Alba) の創設から考えるべきである。

- 1) ・グレート=ブリテン (Great Britain) という名前の由来は、以下のとおりである。紀元前55年と54年に、ローマの執政官ユリウス=カエサル (Gaius Julius Caesar, 100.7.12-44.3.4 B.C.) は、ガリア (ラテン語 Gallia: ゴール英語 Gaul) との戦争を行っている時、現在のイングランド、ウェイルズ、スコットランドから成る島、すなわち、その南部に住むケルト族 (英語 the Celts: ラテン語 Celtae) の1派が自身のことをブリタニ (Pritani: 英語名ブリトン Briton) と呼んでいた島を、侵攻、属州にした。そして、ユリウス=カエサルは、このブリタニ人の住む島のことを、ラテン語名でブリタンニア (Britannia) した。その後、ローマ軍が去った後、407年に、このブリタンニアは、ゲルマン民族の1部アングロ=サクソン人 (Anglo-Saxon: 現在使われている英語の祖) による相次ぐ来襲により、侵入、支配された。この時アングロ=サクソン人は、支配地ブリタンニア (Britannia) を、英語読みのブリタンニア (Britannia) にした。アングロ=サクソン人に追われたブリトン人 (ラテン語名: プリタニ人) の1部は、450年頃、ガリア北西部のアルモリカ (ARMORICA: 現在のフランスのブルターニュ) 地方に渡来、定住した。アルモリカに住むブリトン人 (ラテン語名: プリタニ人) は、自分たちの住む地を、以前住んでいた地 (ブリタンニア: ラテン語名ブリタンニア) よりも小さいのでプティ=ブルターニュ (Petit Bretagne: 小さなブリトン人の土地: プリタンニア=マイナー Britannia Minor: Little Britain) と呼んだ。これに対して、昔住んでいた地、ブリタンニアを、グラン=ブルターニュ (Grand Bretagne: 大きなブリトン人の土地: プリタンニア=プリマ Britannia Prima) と呼んだ。このグラン=ブルターニュが、現代英語読みのグレート=ブリテン (Great Britain) である。
- ・スコットランド (Scotland) という名前の由来は、以下のとおりである。紀元前3500年頃、アルバ (現スコットランド) のピクト人とスキタイ人が融合し、ピクトランドを創設し、アルバの原住民になった。そのアルバ、カレドニアにダルリアダ王国 (the Kingdom of Dál Riada) から、バスク人のDNAを持つスコット族 (the Scots) が侵入し、アルバを支配し、スコット族の国にした。これがスコットランド王国の名前になった。
- 2) 2014年9月18日に実施されたスコットランドの独立を問う住民選挙の結果は、独立反対55.3%、独立賛成44.7%であった。この結果は、現実問題として、言い換えると、スコットランド人の現実的な経済的損益から考えて、独立反対に留まったのであろう、と考えられる。

そこで、本稿では、スコットランド民族の祖先を辿ると共に、対イングランド的感情を醸し出させていったアルバ王国の創設を考察する。

そのアルバ連合王国創設には、当然、スコットランドの地誌、抗争、戦争、経済的要因も考察される。

Ⅱ ピクトランド

現在のスコットランドを含むグレート＝ブリテンは、氷河期末期、紀元前11,000年頃まで、ヨーロッパ大陸と陸続きであった³⁾。

少し暖かくなった紀元前9,000年頃以降、南から氷河が少しずつ溶けだし、樹木、草木が生えるようになってきた。

紀元前7,000年頃、更に氷河が後退したところでは、白樺、常緑高木の檜、松、落葉高木の榆、牧草地、ヒース高原地、雑草林、沼沢地、泥炭地 (peat-bog) ができてきた。

その樹木に覆われたところに、植物：大麦、小麦、トウモロコシ、野イチゴ、果物、木の实が成り、その食べ物を目掛けて、動物：草食動物の野牛、小型の鹿であるノロジカ (roe deer)、野生豚 (wild pig) さらに、肉食動物のクマ、オオカミ、クズリ (wolverine) が遣ってきた。

これらの植物や動物を求め、ヨーロッパ大陸の中央部から、イベリア方面、現イングランド方面、あるいは現アイルランド方面、現北海方面の場所から、現スコットランドに、狩猟採集民 (Hunter-gatherers)、半遊牧民、漁労民が遣ってきて、この地にすでに住んでいた先住民たちと同化し、彼らは、最初の小さなコミュニティー (community：共同社会) をつくり、生活するようになった⁴⁾。

この現スコットランドに遣って来た狩猟採集民、半遊牧民、漁労民たちは、ピレネー山脈 (Pyrénées) の麓に居住していたバスク人 (Basque：Vascos)

3) Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland*, Reprinted of 2003, edition, Lomond Books Ltd, 2010, p. 14 and p. 218.

4) David Ross, *Scotland: History of Nation*, New Edition, Reprinted of 1999, edition, Lomond Books, 2014, p. 35.

のDNA、すなわち男系染色体 (Y-chromosome) を有する人たちであった⁵⁾。

すなわち、紀元前7,000年頃、このバスク人のDNAを有する狩猟採集民、半遊牧民たちが、現地の人と同化し、現スコットランドの先住民となっていったのである。

この小さなコミュニティーを証明するものとして、中石器時代 (c. 8,300 BC ~ c. 6,000 BC) に、肉を切る刃物としてフリント (flints)、動物を射止める矢じり (arrow-heads) が、見つかっている⁶⁾。

このバスク人のDNAを有する狩猟採集民、半遊牧民、漁労民たちは、認識できる文字や言葉を持っていなかったため、自分たちが、辺りを見たまま、氷河がまだ残っている白い状態を、ただ単に発する音として、「ア〜」、「ア〜」と言う、呻き声しか言っていなかった。

その後、この呻き声「ア〜」しか言っていなかった狩猟採集民たちを、最初に会ったケルト族 (the Celts) の1派ゲール人 (the Gaels) が、彼らの住む場所を、ゲール語で、アルバ (ALBA: 白亜の大地: 現スコットランド) とした。

そしてその後、このアルバという言葉は、後にケルト族のゲール人がアルバに定住し、ゲールの言葉として伝承された。

その後、紀元前6,000年頃に、地殻変動により、ヨーロッパ大陸北西部の1部が、ヨーロッパ大陸から分離され、現在のグレート=ブリテンになった。

この分離された時、分離の割れ目に、石灰質の大地、白亜の大地、グレート=ブリテン東南部イーストボーン (Eastbourne) 海岸地帯のセブンシスターズ (Seven Sisters) と、ドーバーのホワイトクリフ (White Cliff: 白亜の崖) が、出現した。

5) Cristian Capelli, Nicola Redhead, Julia K. Abernethy, Fiona Gratrix, James F. Wilson, Torolf Moen, Tor Hervig, Martin Richards, Michael P. H. Stumpf, Peter A. Underhill, Paul Bradshaw, Alom Shaha, Mark G. Thomas, Neal Bradman and David B. Goldstein, "A Y Chromosome Census of the British Isles," *Current Biology*, Vol. 13, Issue 11 (27 May 2003), p. 981.

6) Jeremy Black, *A History of the British Isles*, Second Edition, Reprinted of 1996, edition, Palgrave Macmillan, 2003, p. 3.

この紀元前6,000年頃の中石器時代、バスク人のDNAを有する狩猟採集民、半遊牧民、漁労民たちは、定住することなく、気候に合わせて一時的に留まることにより、食糧を求めて、生活場所を変えていた。そのことは、最近の調査により、一時的に滞在していた野营地や、ゴミ捨て場が、見つまっていることから判明できる⁷⁾。

中石器時代後期から新石器時代の始め頃、少しずつ暖かくなり始めると、氷河が少しずつ溶け出し、溶けた氷は水となり、水蒸気となり、雨雲となり、定期的に雨が降るようになってきた。雨が降ることにより、草木が育ち、野生動物を家畜として飼えるようになってきた。

このような環境条件の中、アルバでは、遊牧的なコミュニティーを廃止し、1か所に定住し、作物を植え、そして次の年の収穫のため、家畜のため、種籾（大麦、小麦）、種トウモロコシを取って置く継続的な農耕を始める準備が整い始めていた⁸⁾。

紀元前4,000年頃の新石器時代、氷河期最後に、さらに温暖化が進み、海面の数位が上昇し出した。

この頃、ヨーロッパ大陸で勢力を増していたのは、ケルト族（the Celts）の1派ブリトン人（the Britons）たちが、現イングランド海峡（English Channel）を渡り、グレート＝ブリテン南部に移動し、ヨーロッパ大陸で盛んになっていた農耕文明をもたらした。

なお、このブリトン人たちは、先住民のケルト族の1派ゲール人たちを凌駕し、その地域に留まり、グレート＝ブリテン南部の原住民になった。

このブリトン人たちは、さらに次第に北部へも、勢力を拡大させていった。

紀元前3,500年頃から、紀元前2,500年頃、アルバでは、気候変動が起こり、冷涼、湿潤化になっていった。この低温により、樹木や草木が枯れ、草食動物やそれを捕食としていた肉食動物も死んでいった。

危機的状態に陥る前に、アルバでは、その紀元前3,500年頃に、農耕文明

7) James Mackay, General Editor, *Pocket Scotland History: Story of a Nation*, Reprinted of 2002, edition, Lomond Books, 2014, p. 14.

8) David Ross, *Scotland: History of Nation*, New Edition, *op. cit.*, p. 36.

がもたらされた。

このアルバに、この農耕文明をもたらしたのは、ケルト族 (the Celts) の1派ゲール人 (the Gaels) であり、彼らは、グレート=ブリテン南部に住んでいたのであるが、ブリトン人たちに押され、北上しアルバに遣って来たのである。

当然、このゲール人たちは、ブリトン人たちの農耕技術を取得していた農民であった。

そこで、アルバのバスク人のDNAを有する定住者たちは、狩猟採集、漁労よりも、共同作業が行える安定的な農耕に、生活の比重を傾け、そして、その生産高を上げるために、石を積み上げた住居チェンバード=ケルン (Chambered Cairn : 玄室を備えた石積塚) をこしらえ、集落 (village) を形成し始めた⁹⁾。

1か所に定住し始めた人たちは、個々の血縁関係だけで、小さなコミュニティで、非定住生活するよりも、他の者を受け入れ大きなコミュニティで、定住生活をし、共同作業をする方が、ヨリ生活が安定するし、他者からも脅威も軽減できると考えた。

そして、その後、その定住者の中で、1番収穫量の多い人物が、権力を持ち、リーダーとなり、そのリーダーが、コミュニティを統括し、ヒエラルキー (hierarchy : 階層制度) 社会を形成していった。

これが、アルバにおける封建制度 (feudalism) の始まりである。

バスク人のDNAを有する人の定住生活、すなわち、集落でのチェンバード=ケルンの具体例は、紀元前3,100年頃から紀元前2,500年頃に造られたオークニー諸島 (the Orkney Islands) のスカラ=ブレ (Skara Brae) 住居遺跡から見る事ができる¹⁰⁾。

9) ・ James Mackay, General Editor, *Pocket Scotland History: Story of a Nation*, *op. cit.*, p. 17.
・ David Ross, *Scotland: History of Nation*, New Edition, *op. cit.*, p. 37.

10) ・ Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland*, *op. cit.*, p. 17.

・ James Mackay, General Editor, *Pocket Scotland History: Story of a Nation*, *op. cit.*, p. 17.

2016年6月 川瀬 進：ケネス1世によるアルバ連合王国の創設

また、紀元前2,900年頃から紀元前2,500年頃、同じオークニー諸島の最大の島、メインランド島 (Mainland) の集落の中に、マース=ハウ (Maes Howe：羨道墳：石室墳墓) がつくられるようになった¹¹⁾。

この埋葬用モニュメントであるマース=ハウは、1999年世界遺産に登録されている。

なお、このマース=ハウは、バスク人のDNAを有する定住者が、着実に集落で、安定的な定住生活を行っていた、ということが窺える。

また、この頃、バスク人のDNAを有する定住者たちは、同じオークニー諸島で、紀元前3,000年頃のステンネス立石群 (the Stones of Stenness)、紀元前2,500年頃から紀元前2,000年頃のブロッガー環状列石 (the Ring of Brodgar) を立てた¹²⁾。

彼らが立てた巨石建造物スタンディング=ストーン (Standing Stone: 立石) が、何のために立てられたかは不明であるが、彼らの建設的技術は、かなり高度なものあったと推測できる。

その後、紀元前2,500年頃、アルバでは、ヨーロッパ大陸からビーカー文化 (Bell-beaker culture: 広口コップ文化) を持った人たちの影響を受けた。

そのビーカー文化の影響は、アルバの東部沿岸から、内陸部まで広まり、死者へのお供え物として、墓の中にビーカーを入れるようになった¹³⁾。

紀元前1,200年頃、黒海北岸地方 (現ウクライナ) に、遊牧騎馬民族であるスキタイ人 (the Scythia) が、勢力を誇っていた。

このスキタイ人の1部は、勢力拡大のため南下し、紀元前900年頃、ヨーロッパ大陸で勢力を増していたケルト族 (the Celts) の1派ゲール人 (the Gaels: その1部が、その後ピクト人 [Picts: ラテン語で、ローマ軍の国境守備隊員が呼んでいたあだ名。命名したのは、82年にアルバに侵攻したロー

11) Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland, op. cit.*, p. 18.

・James Mackay, General Editor, *Pocket Scotland History: Story of a Nation, op. cit.*, p. 17.

12) James Mackay, General Editor, *Pocket Scotland History: Story of a Nation, op. cit.*, p. 19.

13) James Mackay, General Editor, *Pocket Scotland History: Story of a Nation, ibid.*, p. 20.

マ帝国のブリタニア総督グナエウス＝ユリウス＝アグリコラ (Gnaeus Julius Agricola, c. 40.7.13-93.8.23)。ボディー全体にペインティングしている人] と称せられた人) と同化した。

そして、スキタイ人と同化したゲール人 (その1部がその後、ピクト人と称せられた人) が、勢力拡大のため、西へ移動し、ピレネー山脈 (Pyrénées) の麓に住んでいたバスク人 (Basque: Vasco) と同化した¹⁴⁾。

スキタイ人と同化し、バスク人のDNA、すなわち男系染色体 (Y-chromosome) を有するゲール人 (1部ピクト人) が、イベリアに行き、海を渡り北上し、ヒベルニア (Hibernia: ラテン語。アルピオンより西の方にある島なので、西の島: 古代アイルランド語でエイリン (eirinn: 西) の国: ゲール語でエール (Eire) の国: 現アイルランド) へ、そして、アルバに渡って来た。

そして、アルバに渡って来たスキタイ人 (バスク人のDNAを保有) と同化していたゲール人 (1部ピクト人) は、今度は、アルバの定住者と同化し、アルバの住民になっていった。

というのは、現スコットランド人の男性のDNAが、バスク人のDNA、すなわち男系染色体 (Y-chromosome) を有していたからである¹⁵⁾。

また、また、言語学の研究からも、スキタイ人 (バスク人のDNAを保有) と同化したゲール人 (1部ピクト人) が、非インド＝ヨーロッパ語 (現在のヨーロッパで使われていない語) のQ-ケルト語を使っていたことから、判断できる¹⁶⁾。

そこで、ここでいうスキタイ人とは、1320年のスコットランド独立宣言、アーブローズ宣言 (the Declaration of Arbroath) の中で、謳われているグレート

14) Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, Reprinted of 1903, edition AMS Press, 1970, p.15.

15) Cristian Capelli, Nicola Redhead, Julia K. Abernethy, Fiona Gratrix, James F. Wilson, Torolf Moen, Tor Hervig, Martin Richards, Michael P. H. Stumpf, Peter A. Underhill, Paul Bradshaw, Alom Shaha, Mark G. Thomas, Neal Bradman and David B. Goldstein, "A Y Chromosome Census of the British Isles," *Current Biology*, Vol. 13, Issue 11 (27 May 2003), p. 981.

16) James Mackay, General Editor, *Pocket Scotland History: Story of a Nation*, op. cit., pp. 26-27.

=スキタイ人 (the Greater Scythia) のことである、ということが判る¹⁷⁾。

なお、また紀元前900年頃、ケルト族の1派ゲール人 (1部ピクト人) が、勢力拡大のため、西へ、イベリアへ移動したのと同時に、ケルト族の1派ブリトン人たちも、勢力拡大のため、西へ移動した。

グレート=ブリテン南部には、ケルト族の1派ブリトン人たちが、多く移動し、また、ヒベルニア (Hibernia: 現アイルランド) へは、ケルト族の1派ゲール人 (1部ピクト人: バスク人のDNAを保有) たちが、多く移動していった¹⁸⁾。

このブリトン人は、インド=ヨーロッパ語 (現在のヨーロッパで使われている語) のP-ケルト語を使っていた¹⁹⁾

言い換えると、同じケルト族であっても、ブリトン人は、P-ケルト語を使用し、ヒベルニア (現アイルランド) のゲール人、アルバ北部のピクト人は、Q-ケルト語を使用し、言語が全く異なっていた²⁰⁾、ということである。

このケルト系のブリトン人たちは、この現イングランド海峡を渡っている時、イーストボーンのスエレンシスターズやドーバーのホワイトクリフを見て、現グレート=ブリテン全体を、P-ケルト語、ヨーロッパ大陸側から見て、ラテン語のアルビオン (ALBION: 白亜質の絶壁大地) と称した。

また、このラテン語のアルビオンは、言葉数の少なかった当時、ゲール語として口述伝承されていたアルバ (白亜の大地) を、認識してつくられた言葉である²¹⁾。

言い換えると、ゲール語として伝承されていたアルバという言葉は、当然、一面氷河で覆われた「白い大地: 白亜の大地」という意味が確証できる。

17) Edward J. Cowan, *'For Freedom Alone': The Declaration of Arbroath, 1320*, Reprinted of 2003, edition, Birlinn Limited, 2008, p. 146.

18) Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland, op. cit.*, p. 33.

19) James Mackay, General Editor, *Pocket Scotland History: Story of a Nation, op. cit.*, pp. 26-27.

20) Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland, op. cit.*, p. 33.

21) H. M. Chadwick, *Early Scotland: The Picts, the Scots & the Welsh of Southern Scotland*, Reprinted of 1949, edition, Cambridge University Press, 2013, p. 68.

周知のとおり、現アイルランドのヒベルニア、現グレート＝ブリテンのアルピオンという用語を最初に用いたのは、紀元前500年頃、カルタゴの長官、航海士ヒミルコ（Himilco the Navigator：活躍期 c. 480-450 BC）であり、それを自身の航海ノートに記していた。

そのヒミルコの航海ノートの中のヒベルニア、アルピオンを、最初に活字にしたのは、詩人ルーファス＝フェストゥス＝アヴィエネス（Rufus Festus Avienus）であり、彼は、「オラ＝マリティマ（Ora Maritima：航海記）」の中で記した。

このアルピオンという用語が市民権を得て、ヨーロッパ中で使われるようになり、後世に伝わっていった。

その後、紀元前350年頃、このアルピオンという言葉は、マッシリア生まれの記述家、航海士ピュテアス（Pytheas：活躍期 c. 300 BC）が出版した航海記「オン＝ジ＝オーシャン（On the Ocean：海洋記）」から、プレタンニカ（pretanniké：現ブリタニア Britannia）と呼ばれるようになった。

というのは、航海士ピュテアスが、航海中の到着した場所（アルピオン）、すなわちボディー全体にペインティングしている人たちの領地（島）を見て、プレタンニカ（pretanniké：現ブリタニア Britannia）と称したのである²²⁾。

なお、このプレタンニカ（pretanniké：現ブリタニア Britannia）という言葉は、ケルト人が使用していたケルト語のプリタニ（Pritani）、プリテニ（Priteni）から源を発している²³⁾。

すなわち、航海士ピュテアスは、「アルピオン」と呼ばれて島を、プリタニ（Pritani）、プリテニ（Priteni）の人たちが住む領地（島）を「プレタンニカ」と記したのである。

また、このアルピオンという言葉は、アングロ＝サクソン（Anglo-Saxon）

22) Robert Lacey, *Great Tales from English History: A Treasure of True Stories-the Extraordinary People Who made Britain Great*, Reprinted of 2003, edition, Abacus, 2014, p. 6.

23) Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, reprinted of 1991, edition, Trafalgar Square Publishing, 1992, p. 22.

2016年6月 川瀬 進：ケネス1世によるアルバ連合王国の創設

時代、ローマ軍の現グレート=ブリテン侵攻を、ブリタニア（Britannia：イングランド）の聖職者、神学者、歴史家、聖ベータ（Saint Beda：Baeda：Bede, c. 672-735.5.25）が、ラテン語で記した書物の中にある。

すなわち、聖ベータは、“イングランド国民教会史（Historia Ecclesiastica gentis Anglorum：Ecclesiastical History of the English People：A History of English Church and People, 731）”の中で、当時の歴史と伝記を、アングロ=サクソン時代の聖職者、恩師、聖ベネディクト=ビショップ（Saint Benedict Biscop, c.628-690.1.12）が収集した膨大な史料をもとにして著した。

この聖ベータの“イングランド国民教会史，731”は、膨大な史料データを精査しているため、イングランド史における第1級史料である。

具体的に、イングランド史の第1級史料である“イングランド国民教会史”の中に、「ブリテン（Britain）は、昔はアルビオン（Albion）と知られており、ゲルマン、ガリア、スペインの沿岸からか、なり離れた北西に位置している海洋の島である。…」²⁴⁾とある。

アルバに遣って来たケルト族の1派ゲール人（1部ピクト人：バスク人のDNAを保有）は、紀元前200年頃、自身の定住生活を安定させるためにプロホ（Brochs：円塔要塞）という‘ピクト=タワー（Pictish towers）’を建てた²⁵⁾。

アルバに遣って来たゲール人：バスク人のDNAを有するスキタイ人（ピクト人）が円塔の要塞用のプロホを建てたということは、その当時、何らかの戦闘が生じていたということ物語る。

というのは、戦闘ということは、相手に対して何らかの威圧を与えなければならないからである。

つまり、その威圧ためにスキタイ人は、ボディ一面にペインティングを施したのである。

24) Bede, *A History of the English Church and People*, Translated and with an Introduction by Leo Sherley-Price, Revised by R. E. Latham, Reprinted of 1955, edition, Penguin Books, 1968, p. 37.

25) H. M. Chadwick, *Early Scotland*, *op. cit.*, p. xviii.

スキタイ人が、外部から来た敵を脅かすために、自身のボディー一面にペインティングを施したのは、紀元前200年頃である。

なお、ペインティング状態のスキタイ人を、ピクト人と呼んだのは、ローマ軍の国境守備隊員であり、その呼び方を公的に認めたのは、82年にアルバに侵攻したローマ帝国のブリタニア総督グナエウス＝ユリウス＝アグリコラ (Gnaeus Julius Agricola, c. 40.7.13-93.8.23) である。

また、ブリタニア総督グナエウス＝ユリウス＝アグリコラは、そのアルバの地を、ピクトランド (Pictland) と称するようになった。

Ⅲ カレドニア

アルバ (Alba) で、プロホが建造されていた紀元前200年頃、ヨーロッパ大陸では、共和制ローマを中心に、覇権争いが頻繁に行われ、ローマ軍が大帝国への道を歩み始めていた時であった。

具体的には、紀元前121年、共和制ローマ軍が、西部ケルト族の住むガリア (Gallia) 南部を征服し、属州にしたことであった。

その後、共和制ローマ内で、政治家同士の権力争いが始まった。

その争いを鎮め、共和制ローマ内の秩序を回復させるために、紀元前60年、ローマの大富豪クラッス (Marcus Licinius Crassus, 153BC-53.6.9BC)、地中海での海賊排除に名を馳せたポンペイウス (Magnus Gnaeus Pompeius, 106.6.30BC-48.9.28BC)、平民派のガイウス＝ユリウス＝カエサル (Gaius Julius Caesar: 英語名ジュリアス＝シーザー、100.7.12BC-44.3.4BC) の3人が、協定を結び三頭政治を行うようになった。

その3人の内、ガイウス＝ユリウス＝カエサルが、共和制ローマの執政官 (Consul) となり、領土拡大のため、紀元前58年に、西部ケルト族の住むガリア遠征に出撃し、そしてガリア全土を征服した。

そして、その後、執政官ガイウス＝ユリウス＝カエサルは、ガリア遠征、征服の一環として、紀元前55年8月末最後の週に、ガリア北部、すなわちブリタニ (Britanni) と呼ばれている人たち (民族) の住むブローニュー

(Boulogne：現フランス北部) のポルトゥ=イツゥ (Portus Itius) に、ベース=キャンプを置き²⁶⁾、そこから、2個軍団を引き連れ、北部対岸、イングランド海峡 (English Channel) の現ドーバー海峡 (the Straits of Dover) を渡り、プレタニック=アイランズ (Pretanic islands) 南部に進攻した²⁷⁾。

このローマ軍の進攻時、執政官ガイウス=ユリウス=カエサルは、まだプレタニック=アイランズが、島であることも、その原住民の名前も知らなかった²⁸⁾。

この進攻中に、執政官ガイウス=ユリウス=カエサルは、プレタニック=アイランズに住む人たちブリタニ (Pritani) あるいはプリテニ (Priteni) を、ガリア北部に住む人たちブリタニ (Britanni) と同一し、プレタニック=アイランズに住む人たちを、ラテン語の「ブリタンニア Britannia：ブリタニ人の住む地」とした²⁹⁾。

なお、このラテン語の「ブリタンニア Britannia」は、英語の「ブリタニア」である。

このローマ軍のプレタニック=アイランズへの進攻理由は、2つある。

1つ目は、反ローマ派のケルト族 (the Celts) の1派ベルガエ人 (the Belgae) が、そのプレタニック=アイランズへ逃げ込んでいたこと。

2つ目は、プレタニック=アイランズへ逃げ込んだベルガエ人が、そのプレタニック=アイランズで居住しているケルト族 (the Celts) の1派ブリトン人 (the Britons) たちと協同で、ガリアの反ローマ人たちを支援していたことである。

この執政官ユリウス=カエサルの紀元前55年8月末最後の週のガリア遠征は、進攻の情報を得ていたケルト族の1派ベルガエ人の沿岸での猛攻に遭い、

26) Malcolm Todd, *Roman Britain*, Third Edition, Reprinted of 1981, edition Blackwell Publishers, 1999, p. 7.

27) Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, *op. cit.*, pp. 25-26.

28) Malcolm Todd, *Roman Britain*, *op. cit.*, p. 7.

29) E. L. Woodward, *A History of England*, Reprinted of 1947, edition, Cambridge University Press, 1984, p. 2.

・ R. G. Collingwood and J. N. L. Myres, editors, *Roman Britain and the English Settlements*, BIBLO and TANNEN, 1937, p. 31.

失敗に終わり、3週間でガリアに戻った³⁰⁾。

再度、執政官ガイウス=ユリウス=カエサルは、紀元前54年7月最初の週、ローマ軍第5軍団歩兵隊2,000人を引き連れ、サンドイッチ (Sandwich) 近くに進攻した。だが、この第2回目の遠征も、ケルト族の1派ブリトン人たちの猛攻に逢い失敗に終わった³¹⁾。

プレタニック=アイランズでのブリトン人は、ローマ軍を撃破することにより、平穏を勝ち取り、また、共和制ローマ内での内戦により、継続的な平和を手に入れることができた。

だが、その平和も、ローマの皇帝が変わると、プレタニック=アイランズの状態は、一変した。

すなわち、43年、ローマ皇帝に、クラウディウス (Tiberius Claudius Drusus Nero Germanicus, 10 BC-AD 54 : 在位41-54) が就任すると、プレタニック=アイランズへの遠征が、再開されたのである。

ローマ軍は、アウルス=プラウティウス (Aulus Plautius : 総督在位43-47) を総司令官として、4軍団40,000人の規模で遠征に出た。

その遠征の結果、ブリトン人の住むプレタニック=アイランズの首都カムロドゥスム (Camulodunum : ロンドン北東約80km先の現コールチェスター Colchester) が、ローマ軍によって占領されてしまった³²⁾。

プレタニック=アイランズの南部から侵攻しローマ軍は、その島の4分の3を征服し、その征服地をローマ帝国属領ブリタニア州 (ラテン語 Britannia : 英語読みブリタニア : 現イングランド) にした。

その初代ブリタニア州総督として、アウルス=プラウティウスが就任した。

征服されたブリタニア州の中で、44年、東ブリタニア、現ノーフォーク (Norfolk)、現サフォーク (Suffolk)、現ケンブリッジシャー (Cambridgeshire)

30) Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain, op. cit.*, p. 26.

31) Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain, ibid.*, p. 26.

32) Thomas Hodgkin, *The History of England: from the Earliest Time to the Norman Conquest, to 1066*, in William Hunt and Reginald L. Poole editors, *The Political History of England*, Vol. 1, Reprinted of 1914, edition, AMS Press, Kraus Reprint Co., 1969, 32.

辺りを統治していたブリトン人の1部族イケニ族 (the Iceni)、プラスタグス王 (Prasutagus, King of the Iceni, ?-60) は、ローマ軍と、意図的な約束を含んだ下臣同盟を結び、名目上の独立を維持していた³³⁾。

だが、60年にイケニ族の王プラスタグスが、男子継承者無く、亡くなると、事態は一変した³⁴⁾。

完全征服を目指したローマ皇帝ネロ (Nero, 37.12.15-68.6.11：在位54-61) により、新たな多数のローマ軍団がイケニ王国に送り込まれ、プラスタグス王の約束は反故にされ、名目上の独立はなくなり、虐待を受け、イケニ王国は、完全なローマの従属的な立場に置かれた³⁵⁾。

これに対し、61年、イケニ王国の後を引き継いだプラスタグス王の未亡人、ボアディケア女王 (Boadicea (ボウディッカ Boudicca), Queen of the Iceni) は、イケニ王国の人びとの権利と自由を守るため、ローマ軍に対し反撃に出た³⁶⁾。

ボアディケア女王は、虐待を受けていた近隣のブリトン人の1部族トリノヴァンテス族 (the Trinovantes) とブリトン人の1部族カトゥヴェラウニ族 (the Catuvellauni)、さらにそれ以外、反ローマ派のケルト系先住民ブリトン人たちを仲間に引き入れ、諸族同盟を創った。

この反撃に対し、ブリタンニア州総督ガイウス=スエトニウス=パウリヌス (Gaius Suetonius Paullinus：総督在位c.58-61) は、武力でもって鎮圧しなければならなくなった。

すなわち、ブリタンニア州総督ガイウス=スエトニウス=パウリヌスは、鎮圧の実働部隊として、指揮官クイントゥス=ペティリウス=ケリアス (Quintus Petillius Cerialis, c.30-c.83) の第9軍団ヒスパナ (Legio IX Hispana) を、また指揮官グナエウス=ユリウス=アグリコラ (Gnaeus Julius Agricola, c. 40.7.13-93.8.23) の第2軍団アウグスタ (Legio II Augusta) を、イケニ王国に向かわせた³⁷⁾。

33) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *ibid*, p. 33.

34) Robert Lacey, *Great Tales from English History*, *op. cit.*, p. 14.

35) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *op. cit.*, pp. 39-40.

36) Robert Lacey, *Great Tales from English History*, *op. cit.*, p. 16.

そのボアディケア女王率いる諸族同盟軍は、ローマ化されたブリトン人の首都カムロドゥヌム（Camulodunum）を奪還し、ローマから派遣された指揮官クイントゥス＝ペティリウス＝ケリアス率いる第9軍団ヒスパナを、壊滅状態にさせた³⁸⁾。

この壊滅状態とは、第9軍団ヒスパナの歩兵隊だけであって、指揮官クイントゥス＝ペティリウス＝ケリアスと騎馬兵は、逃げ延びた。

そして、さらにボアディケア女王の諸族同盟軍は、ローマ軍の主要駐屯地ロンディニウム（Londinium：現在のロンドンLondon）の街を略奪し、ヴェルラムウム（Verulamium：現セント＝オールバンスSt. Albans）の街を破壊した³⁹⁾。

ボアディケア女王の軍事的勢いは、止まらなかった。

これに対し、軍事的規模では劣っていたが、ブリタンニア州総督ガイウス＝スエトニウス＝パウリヌスは、戦略上、組織上では、優れていた。

クイントゥス＝ペティリウス＝ケリアス指揮官率いる弱体化した第9軍団ヒスパナと共に、ブリタンニア州総督ガイウス＝スエトニウス＝パウリヌスは、知略（trap）でもって、ボアディケア女王軍を、背後に森、その森の両側は急峻な丘がある細い道、すなわちワトリング街道（Watling Street）に追い込み、そして、ローマ軍が、その急峻な丘に陣取り、ワトリング街道戦（Battle of Watling Street）を挑んだ。結果は、ローマ軍の騎兵隊および歩兵のピルム（Pilum：短くて重い投槍）の活躍で勝利を得た⁴⁰⁾。

この結果、ボアディケア女王の反撃は、ローマ軍の州総督ガイウス＝スエトニウス＝パウリヌスの知略により、女王軍80,000人、ローマ軍400人が犠牲となり、失敗に終わったのである。

37) Cf. Peter Salway, *The Oxford Illustrated History of Roman Britain*, Oxford University Press, 1993, p. 84.

38) ・Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *op. cit.*, p. 41.
・Peter Salway, *The Oxford Illustrated History of Roman Britain*, *op. cit.*, p. 82.

39) Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, *op. cit.*, p. 35.

40) ・Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *op. cit.*, pp. 42-43.
・Peter Salway, *The Oxford Illustrated History of Roman Britain*, *op. cit.*, p. 84.

逃げ延びたボアディケア女王は、この敗戦の情報を聞き、服毒自殺を図り、一生を終えた⁴¹⁾。

なお、偉大なボアディケア女王の遺骨は、キング=クロス駅 (King's Cross Station) の10番プラットフォームの地下に埋葬されているといわれている。

だが、実際は、偉大なボアディケア女王の遺骨は、歴史家の調査によると、キング=クロスの北部100マイル以上離れたところ、現イングランド中部、ウォリックシャーのマンセッター (Mancetter) 付近に埋葬されている。その埋葬地は、偉大なボアディケア女王が最後に戦った戦場地であり、そこへは、ロンドンと北西部を結ぶユーストン=ライン鉄道で行ける⁴²⁾。

ローマ帝国属領ブリタンニア州での内乱が収まった後、ローマ皇帝の課題は、ブリタンニア州以北を、征服することであった。

すなわち、ブリタンニア州以北の非征服地に、進撃することであった。

ボアディケア女王軍との戦いで、61年に、クイントゥス=ペティリウス=ケリアス指揮官率いる弱体化した第9軍団ヒスパナは、その後、ゲルマニアから約7,000人の兵士を軍団に引き入れ、兵力を補強していた⁴³⁾。

この補強された第9軍団ヒスパナは、北部非征服地と国境を接し、同盟を結んでいたブリガンテス族 (Brigantes) の住む地方に向かった。

その向かった理由は、当然ブリトン人の1部族ブリガンテス族 (the Brigantes) の不穏な動きが、見られたからである。

ローマ皇帝クラウディウスが、43年に、プレタニック=アイランズの4分の3を征服し、その征服地をローマ帝国属領ブリタンニア州にした。

その時、その北部に居住していたブリガンテス族とは、友好関係であった。

というのは、その女王カルチマンドゥア (Cartimandua: 在位 c. 43-c. 69) が、親ローマであったからである⁴⁴⁾。

41) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *op. cit.*, p. 43.

42) Robert Lacey, *Great Tales from English History*, *op. cit.*, p. 16.

43) R. G. Collingwood and J. N. L. Myres, editors, *Roman Britain and the English Settlements*, *op. cit.*, pp. 102-103.

・ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *op. cit.*, p. 44.

44) Malcolm Todd, *Roman Britain*, *op. cit.*, p. 20.

また、その43年は、反ローマのブリタンニア部族長カラタクス (Caratacus) とトゴドゥムヌス (Togodumnus) 兄弟が、南東部で、ローマ軍と対立し、そしてそのローマ軍とのメドウェイの戦い (the Battle of the Medway) で敗れ、トゴドゥムヌスが殺害され⁴⁵⁾、そしてカラタクスは、南西部カムリ (ウェイルズ) のシルレス族 (the Silures) のもとに逃走し、生き延びた時であった⁴⁶⁾。

ローマ皇帝クラウディウスは、47年秋、ブリタンニア州総督を、アウルス=プラウティウスから、プーブリウス=オストリウス=スカプラ (Publius Ostorius Scapula) に交代させた。

この43年秋においては、ローマ軍は、まだブリガンテスとシルレスを、制圧できていなかった⁴⁷⁾。

このカラタクスは、逃走した後も、すなわち43年以降も、カムリ一帯の部族長を巻き込み、激しい反ローマ活動を行っていた。

このことが、ローマ軍の領土拡張政策に支障となり、カラタクスは、51年、ローマ軍から攻撃、追跡される羽目となった。

さらに逃走を続けたカラタクスは、助けを求め、北部のブリガンテスに逃げ行った。

だが、親ローマのカルチマンドゥア女王は、この反ローマのブリタンニア部族長カラタクスを捕らえ、ローマ軍に引き渡した⁴⁸⁾。

この親ローマのカルチマンドゥア女王の行為に対し、夫の反ローマのウェヌスティウス (Venutius) は、女王と別れ、反ローマの指導者となり、ブリガンテスを攻撃するようになった。

45) ・ Peter Salway, *The Oxford Illustrated History of Roman Britain*, *op. cit.*, p. 63.

・ R. G. Collingwood and J. N. L. Myres, editors, *Roman Britain and the English Settlements*, *op. cit.*, pp. 84-85.

46) ・ Peter Salway, *The Oxford Illustrated History of Roman Britain*, *op. cit.*, p. 51.

・ R. G. Collingwood and J. N. L. Myres, editors, *Roman Britain and the English Settlements*, *op. cit.*, pp. 89-90.

47) R. G. Collingwood and J. N. L. Myres, editors, *Roman Britain and the English Settlements*, *op. cit.*, p. 91.

48) Peter Salway, Roman Britain, in George Clark, edited, *The Oxford History of England*, Vol. IA, Oxford University Press, 1991, p. 133.

結果は、69年、親ローマのカルチマンドゥア女王軍が敗れ、夫の反ローマのウェスティウス王が、ブリガンテスを統治するようになった。

このことから、ローマ軍は、クイントゥス＝ペティリウス＝ケリアス指揮官率いる補強された第9軍団ヒスパナを、ブリガンテスに向けたのである。

ローマ皇帝クラウディウスが、43年に、プレタニック＝アイランズの4分の3を征服し、その征服地をローマ帝国属領ブリタンニア州にした時、その北部に居住していたブリガンテス族とは、同盟を結び、友好関係であった。

だが、ブリガンテス族のリーダーが、反ローマ派になると、必然的に、ローマからの支配を排除しようとする機運が芽生えてきた。

ブリガンテス族の領域は、非征服地と接する地域であり、もしこのブリガンテス族が、反ローマ派になると、北部でのパワーバランスが崩れ、非征服地側の人びとが、南下し、ローマ軍を脅かすことになるのである。

そこでローマ軍は、この芽生えを断ち切り、ブリガンテス族を、完全に征服しなければならなくなった。

このことを実現させるために、ローマ軍の指揮官クイントゥス＝ペティリウス＝ケリアスは、補強した第9軍団ヒスパナ率いて、ブリガンテスの中心地、現ヨーク（York）に遣って来て、71年に征服したのである⁴⁹⁾。

そして、指揮官クイントゥス＝ペティリウス＝ケリアス率いる第9軍団ヒスパナは、このヨークに駐屯地、都市を建設し、そこを非征服地に進撃する拠点としたのである。

その後、征服できなかったブリタンニア州の以北、すなわち非征服地であるアルビオンの北部4分の1の征服を、ローマ皇帝ウエスパシアヌス（Titus Flavius Vespasianus, 9.11.17-79.6.23：在位69-79）が、79年の春に命じた。

すなわち、79年春、その実働部隊として、ローマ軍第2軍団アウグスタの指揮官であるグナエウス＝ユリウス＝アグリコラが、ブリタンニア州総督に指名された⁵⁰⁾。

49) R. G. Collingwood and J. N. L. Myres, editors, *Roman Britain and the English Settlements*, *op. cit.*, p. 109.

この指名により、79年夏から2年間、州総督グナエウス＝ユリウス＝アグリコラの指揮命令系統は、占領地、ヨークシャー、ランカッシャー、ノーサンバーランド、ブリガントス地域に、完全に行き届くようになった⁵¹⁾。

だが、ローマ皇帝ウェスパシアヌスは、下痢 (diarrhea) により、志半ばにして倒れた。

その後、ローマ皇帝を受け継いだのは、ウェスパシアヌスの長男ティトゥス (Titus) であった。

ローマ皇帝ティトゥス (Titus Flavius Sabinus Vespasianus, 39.12.30-81.9.13: 在位78-81) も、熱病 (fever) に掛かり、アルピオン北部の征服を断念せざるを得なかった。

次に、ローマ皇帝を受け継いだのは、ウェスパシアヌスの2男であり、ティトゥスの弟であるドミティアヌス (Domitianus) である。

ローマ皇帝ドミティアヌス (Titus Flavius Domitianus, 51-96: 在位81-96) は、頓挫していたアルピオン北部の遠征を、82年に再開すると共に、キリスト教徒を迫害していった。

3年間待たされたブリタニア州総督グナエウス＝ユリウス＝アグリコラは、再度、軍を召集し、カムリ (Cymry: 現ウェイルズ) 経由で北部へと向かい、第9軍団ヒスパナに攻撃を与えているケルト系ブリトン人の1部族ブリガントス人たちを制圧した。

そして、ブリタニア州総督グナエウス＝ユリウス＝アグリコラは、5,000人規模の第9軍団ヒスパナと、ヒベルニア (Hibernia: 現アイルランド) からの1軍団と予備兵による適切な兵站 (ヘイタン: 食糧・武器供給の後方支援) を加え、精鋭陸軍25,000人を引き連れ、ブリタニア以北の非征服地を目指し進撃した⁵²⁾。

その進撃途中、ブリタニア州総督グナエウス＝ユリウス＝アグリコラが、不毛なU字溪谷の高原地に、広大な深緑の樹木林が続く非征服地で目にした

50) Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland, op. cit.*, p. 27.

51) Thomas Hodgkin, *The Political History of England, Vol.1, op. cit.*, p. 48.

2016年6月 川瀬 進：ケネス1世によるアルバ連合王国の創設

ものは、攻撃的で、ボディー全体にペインティングしている人たちと、彼らの居住周辺に、要塞的な建造物プロホ（Brochs：円塔要塞）とであった⁵³⁾。

そこで、この時点で、ブリタニア州総督グナエウス＝ユリウス＝アグリコラは、ボディー全体にペインティングしている人たちを、公的にピクト人（the Picts）と呼び、その深緑樹木の非征服地を、ピクトランド（Pictland）から、カレドニア（Caledonia：緑樹林の地：現スコットランド）と呼ぶようにした⁵⁴⁾。

このピクト人、カレドニアという言葉は、一般的に認められ、現在にきている。

このカレドニアは、黒雲が低く垂れ籠め、刻一刻と天候が急変し、冷たいシャワー状の小雨が暴風雨ともなりうる不毛なU字溪谷の高源地であり、その高原地には、広大な深緑の樹木林が続いていた。

また、このカレドニアは、地誌的にみて、生活条件は、ブリタニアよりも、況してや温かいローマよりも、かなり厳しい地であった。

IV アルバ連合王国

カレドニアでの厳しい地誌的環境に育ったピクト人は、ローマ軍と戦って勝てる唯一の術は、寒さに耐えられる気丈な精神力だけであった。

ピクト人の軍事力は、ローマ精鋭陸軍よりも、軍事的に統括する指揮命令系統、最新の武器の数量、歩兵軍人の数、どれをとっても劣っていた。

戦いが始まると、当然の結果的として、ピクト人は、ローマ精鋭軍隊により、カレドニア南部から、北東部に追いやられた。

そして、次にブリタニア州総督グナエウス＝ユリウス＝アグリコラは、そのカレドニアの北東部に追い詰めたピクト人を、海から攻撃するために、ローマ海軍の艦隊を向けた⁵⁵⁾。

52)・Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland*, *ibid.*, p. 27.

・Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *op. cit.*, p. 50.

53) H. M. Chadwick, *Early Scotland*, *op. cit.*, p. xviii.

54) H. M. Chadwick, *Early Scotland*, *ibid.*, p. xviii.

カレドニア北東部に追いやられていたピクト人は、その沿岸近くに着岸したローマ艦隊から、進撃を受けるようになった。

その結果、84年夏、カレドニア北東部、沿岸からあまり遠くないところ、大溪谷のあるストラスモア (Strathmore) の北東付近、フォーファー (Forfar) あるいはブレッチン (Brechin) 付近のグラウピウス (Graupius) で、大きな戦いが始まった。

いわゆる、モンズ＝グラウピウスの戦い (the Battle of Mons Graupius) である⁵⁶⁾。

カレドニア (ピクト人) の族長、カレドニアのヒーロー、勇猛果敢な貴族カルガカス (Calgacus : Galgacus) 率いるピクト人は、南部から、また沿岸から攻め寄るローマ軍よりも、規模では優っていたが、その装備やスキルに関しては劣っていた。

カルガカス率いるピクト軍は、約30,000人、一方州総督グナエウス＝ユリウス＝アグリコラが率いるローマ軍は、援軍8,000人、騎馬兵5,000人、多くの予備兵たち、合計で約20,000人であった⁵⁷⁾。

結果は、ピクト軍10,000人、ローマ軍360人の犠牲者がでて、軍事的スキルが優っていたローマ軍の勝利であった⁵⁸⁾。

戦いに生き延びたピクト人たちは、その夜に、ハイランド (Highland) 奥深く逃げて行った。

翌朝、ローマ軍は、ハイランドに逃げて行ったピクト人たちを追わなかった⁵⁹⁾。

州総督グナエウス＝ユリウス＝アグリコラは、カレドニア全土を征服できなかったが、その1部が平穏状態になったことを確認し、ローマ軍を南下さ

55) R. G. Collingwood and J. N. L. Myres, editors, *Roman Britain and the English Settlements*, *op. cit.*, p. 114.

56) Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland*, *op. cit.*, p. 28.

57) James Mackay, General Editor, *Pocket Scotland History: Story of a Nation*, *op. cit.*, p. 36.
Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland*, *op. cit.*, p. 29.

58) Peter Salway, *The Oxford History of England*, Vol. IA, *op. cit.*, p. 148.

2016年6月 川瀬 進：ケネス1世によるアルバ連合王国の創設

せるとともに、自らカレドニア全域を把握するため、艦船を北上させ、調査に出た⁶⁰⁾。

そして、海上からカレドニアを調査し、一周してブリタンニアに戻った州総督グナエウス＝ユリウス＝アグリコラは、初めて、ブリタンニアが島であることを確認した。

その直後、州総督グナエウス＝ユリウス＝アグリコラは、ローマ皇帝ドミティアヌスにより、帝国内の紛争解決のため、ローマに呼び戻された。

その呼び戻された理由は、ブリタンニアでのグナエウス＝ユリウス＝アグリコラの輝かしい業績が、ローマ皇帝ドミティアヌスのゲルマニアでの業績より、高府評価されるのを嫉妬 (jealous) したからである⁶¹⁾。

しばらくの間、ブリタニアにとって、平穏な日々が続いた。

だが、ローマ皇帝ハドリアヌス (Hadrianus, 76.1.24-138.7.10：在位117-138) 治世時になると、頻繁にピクト人が、カレドニアから南下し、ローマ軍と戦った。

このピクト人たちの攻撃を防ぐために、ハドリアヌス皇帝は、122年から

59) スコットランドには、地誌的に区別して中部・東部のローランド (Lowland) と北西部のハイランドに分けられる。スコットランド中部にローモンド湖 (Loch Lomond) がある。このローモンド湖は、氷河が作り出したブリテン最大の淡水湖である。現在は、貯水湖として使われている。このローモンド湖の西北部沿岸の山手に、オーシェンデナン＝ハウス (Auchendennan House) がある。現在は、スコティッシュ＝ユース＝ホテル (The Scottish Hostel) になっている。オーシェンデナン＝ハウスは、依然、ロバート＝ザ＝ブルースの狩猟小屋 (King Robert the Bruce's hunting lodge) があったところである。ローモンド湖近辺はハイランド入口で、何ら問題はないが、それ以北になると峻険な山々が繋がっており、人が容易く出入りできるような場所ではない。ローマ軍が、モンズ＝グラウピウスの戦いにおいて、戦いに生き延びたピクト人たちを追わなかった理由は、納得できる。

60) Peter Salway, *The Oxford Illustrated History of Roman Britain*, op. cit., p. 106.

・Peter Salway, *The Oxford History of England*, Vol. IA, op. cit., p. 149.

61) Matthew Bennett, Jeremy Back, Michael Brown, Christopher Durston, Simon Esmonde Cleary, Raymonde Gillespie, Reg Grant, Simmon Hall, Martin Henig, Ian V. Hogg, John Haywood, Ronald Hutton, Peter Martland, Janet L. Nelson, Robert Peberdy, Michael Prestwich Glyn Redworth, Sasha Roberts, Adrian Room, Joe Staines and Jason Tomes, by Editors, *The Hutchison Illustrated Encyclopedia of British History*, Reprinted of 1995, edition, Helicon, 1996, p. 4.

126年にかけて、カレドニアとブリタンニアの境界線に壁を造り、ピクト人たちの南下を阻止した。

この壁は、ハドリアヌスの城壁 (the Hadrian's Wall) として知られ、ウォールSEND (Wallsend) からボウネス=オン=ソルウエイ (Bowness-on-Solway) の120キロメートル (76 Roman miles) にも及ぶ石塁壁である⁶²⁾。

戦闘能力に長けたピクト人は、このハドリアヌスの城壁をものとせず、城壁を越えて、再度しばしば、ローマ軍を攻撃してきた。

これに対し、駐屯地のローマ軍人やその家族を守るため、言い換えるとピクト人との境界線を北部に押し上げるために、ローマ皇帝アントニヌス=ピウス (Antoninus Pius, 86.9.19-161.3.7 : 在位138-161) は、142年から144年にかけて、アントニヌスの城壁 (the Antonine Wall)、フォース湾沿いのブリッジネス (Bridgeness) からクライド湾沿いのオールド=キルパトリック (Old Kilpatrick) の58.5キロメートル (40 Roman miles : Roman mile=1618 yards) にも及ぶ芝土塁壁を築造させた⁶³⁾。

だが、この城壁に対しても、ピクト人の攻撃は収まらなかった。

結果、ローマ軍は、このアントニヌスの城壁を、163年頃に放棄した⁶⁴⁾。

これにより、ローマ軍は、180年に、ハドリアヌスの城壁まで、後退した。

アントニヌスの城壁近くに領域を持っていたピクト人、マエアタ人 (Maeatae) を、次期ローマ皇帝カラカラ (Marcus Aurelius Antonius Bassianus Caracalla, 186.4.4-217.4.6 : 在位211-217) が、210年に追い払おうと試みたが、失敗した。

ヒベルニア (Hibernia : ラテン語、現アイルランド) の北東部アルスター (Ulster) から、スコット人 (the Scots) の開拓者リュウド (Reuda) が率いるスコット人たちが、258年頃、最初にカレドニア西南部に入植した⁶⁵⁾。

62) Malcolm Todd, *Roman Britain*, *op. cit.*, p. 118.

63) Malcolm Todd, *Roman Britain*, *ibid.*, p. 128.

64) Peter Salway, *The Oxford History of England*, Vol. IA, *op. cit.*, p. 206.

・ R. G. Collingwood and J. N. L. Myres, editors, *Roman Britain and the English Settlements*, *op. cit.*, p. 154.

65) David Ross, *Scotland: History of Nation*, New Edition, *op. cit.*, p. 291.

このスコット人もピクト人と同じで、ケルト族の1派ゲール人であり、バスク人のDNAを保有する人たちである⁶⁶⁾。

スコット人である開拓者リューダ (Reuda) が、カレドニア西南部に入植できたということは、今後、ヒルベニアからの入植者が多く増えるということの意味していると共に、将来、アルバ王国連合 (the United Kingdom of Alba) を創設するケニス=マッカルピン (Kenneth MacAlpin, 810-858.2.13) が遣って来る礎を作ったということをも意味している。

カレドニアに最初に入植した時点、スコット人のリュウドは、略奪者ではなく開拓者であり、友好的にピクト人から土地を得ていた。

だがその後、ヒルベニアからのスコット人の入植者が増えるにつれて、リュウドは、ピクト人の支配地の中で、少しずつ自身たちの領土を拡大させていった。

ピクト人とより勢力を増していったスコット人は、360年、ハドリアヌスの防塁を越え、ローマ軍の主要駐屯地ロンディニウム (Londinium: 現在のロンドン London) の街まで、侵入してきた。

このことにより、ピクト人とスコット人は、360年、少数民族のアタコッティ人 (the Attacott) バーバリアンと共謀し、ますますハドリアヌスの城壁を越え、ますますローマ軍を攻撃するようになってきた⁶⁷⁾。

これに対し、ローマ軍は、司令官マグヌス=マクシム (Magnus Maximus, c. 355-388.8.28) の下、382年にピクト人とスコット人の攻撃に成功し、彼らを北部に追いやることができた。

この成功に気を良くした司令官マグヌス=マクシムは、皇帝の座を狙うために、カレドニアから軍を引き連れ、ローマに戻った⁶⁸⁾。

強力なローマ軍が去った後、ローマ皇帝コンスタンティヌス1世 (Constantinus I, Gaius Valerius, 288.2.27-337.5.22: 在位3024337:306以後副帝) が国教と公認していたキリスト教が、初めてカレドニアに入ってきた。

すなわち、ブリトン人の聖ニニアン (St. Ninian, 360-432) が、キリスト教

66) Cf. James Mackay, General Editor, *Pocket Scotland History: Story of a Nation*, op. cit., p. 45.

67) Peter Salway, *The Oxford History of England*, Vol. IA, op. cit., p. 369.

68) Peter Salway, *The Oxford History of England*, Vol. IA, *ibid.*, pp. 401-402.

の布教活動のため、ソルウェイ湾 (Solway Firth) 沿岸、ホイットホーン (Whithorn) にて、397年、カンディダ=カーサ (Candida Casa : 白き輝きを放つ家) と知られる男子修道院を建てたのである⁶⁹⁾。

カレドニアにとって、この聖ニアンとその布教者たちは、侵入者であったが、将来、キリスト教でもって、北部カレドニアを統一させる礎を築いた。

また、強力なローマ軍が去ると、ピクト人とスコット人は、勢力を増し、ハドリアヌスの城壁を越え、南部深くまで侵入し、ローマ軍を襲撃した。

これと同調して、ドイツ北部から北海を渡り、カレドニア南東部に入植したアングル人 (the Angles) も、侵入してきた。

このような状況下により、西ローマ皇帝ホノリウス (Flavius Honorius, 384.9.9-423.8.15 : 在位395-423) は、ハドリアヌスの城壁を補強するのを止め、400年頃に放棄した。

さらに、国内の内乱において、西ローマ皇帝ホノリウスは、409年、ついにカレドニアおよびブリタンニアの征服を断念した。

カレドニアおよびブリタンニアからローマ軍が撤退した後、各部族がそれぞれ独立した軍事力を増し、勢力を拡大させ、各部族間の境界線、がはっきりと示されるようになってきた。

その後、498年から503年にかけて、ヒバルニア (現アイルランド) の北東部アルスターから、海を渡り、スコット人の族長ファーガス2世 : ファーガス=モー=マク=エルク (Fergus II : Fergus Mor mac Erk, 430.6.29-501.10.12) が、大勢のスコット人を引き連れ、キンタイア半島 (Kintyre : Cantire) に上陸し、友好関係であったピクト人の土地を略奪し、ピクト族を北東部に追いやり、500年に、出身地名を採りダルリアダ王国 (the Kingdom of Dàl Riada : Dalriada) を建設した⁷⁰⁾。

なお、このダルリアダ王国は、カレドニア内においては小王国であった

69) ・ James Mackay, General Editor, *Pocket Scotland History: Story of a Nation, op. cit.*, p. 46.
・ David Ross, *Scotland: History of Nation*, New Edition, *op. cit.*, pp. 46-47.

70) ・ James Mackay, General Editor, *Pocket Scotland History: Story of a Nation, op. cit.*, p. 60.
・ David Ross, *Scotland: History of Nation*, New Edition, *op. cit.*, p. 47.

この時点で、カレドニアでは、4つの部族が存在するようになった。

すなわち、北東部のピクト族、北西部のスコット族、南東部のアングル族、南西部のブリトン族である。

この部族たちを詳述すると下記ようになる。

北東部のピクト族：ピクト人は、ケルト系のスキタイ人（バスク人のDNAを保有）と同化していったゲール人の1部族であり、そのピクト人は、新天地アルバの定住者と同化し、アルバの原住民となり、カレドニア北東部でアルバ王国（the Kingdom of Alba）を建設した。なお、このアルバ王国は、カレドニア内においては、大王国であった。

北西部のスコット族：スコット族は、ヒルベニア北東部から、カレドニアに渡来してきた人たちで、ダルリアダ王国を建設した。なお、このダルリアダ王国は、カレドニア内においては、小王国であった。

南東部のアングル族：アングル人は、ゲルマン系であり、ノーザンブリア王国（the Kingdom of Northumbria）を建設した。

南西部のブリトン族：ブリトン人は、ブリタンニアを追われた人びとである。

この4部族たちは、それぞれ多少の抗争を続けながらも、8世紀半ば位まで、それぞれのパワーバランスを保ちながら生活していた。

スコット族とピクト族の間に、776年、紛争が始まった。

その後、南東部のアングル族は、ノーザンブリア王国を創設した。そして、このノーザンブリア王国のアングル族は、793年、ヴァイキング（the Vikings）に襲撃されたり、アングロ＝サクソン（Anglo-Saxon）内での抗争が続いたりしたことにより、カレドニア内奥深くまで、勢力を拡大させてこなかった。

このヴァイキングは、795年に、アイオナ島（Iona）、スカイ島（Skye）、ヒベルニア内部、特に北部沿岸を襲撃し、その地の人びとに恐怖心を植え付けた⁷¹⁾。

また、このヴァイキングは、ピクト族をも襲撃し、ピクト王コンスタンティン1世（Constantine I, King of the Picts）を、820年に殺害した⁷²⁾。

この殺害により、ピクト族の間では、ピクト族は、スコット族と団結し、

連合を組みたいという機運が、高まって来た⁷³⁾。

ケニス=マッカルピン (Kenneth MacAlpin, 810-858.2.13) の祖父、すなわちスコット人でダルリアダ王アケイアス (King Achaius, d. 819) と、ピクト人でアルバ王家の王女ファーギシア (Fergusia) との間に、アルピン王 (King Alpin, d. 834.8) が生まれた。

このスコット人でダルリアダ王アルピンは、ケニス=マッカルピンの父であり、ピクト人のアルバ王家の血を受け継いでいた。

ピクトのアルバ王家で男系の継承者が絶えたとき、ダルリアダ王アルピンが、母側の権利を主張することによって、アルバ王国の王位継承権を要求した。

だが、この要求は、アルバ王国内のリーダーたちのコンセンサスが得られず、反対に、ダルリアダ王アルピンは、アルバ王国のピクト人によって反発を受ける身となった。

この反発にもめげず、ダルリアダ王アルピンが、王位継承権を要求し続けたとき、スコット族とピクト族との争いが勃発し、結果的に、ダルリアダ王アルピンが834年8月に、ピクト族によって処刑された。

この処刑により、皇太子のケニス=マッカルピンが、ダルリアダの王位を継承し834年にスコット王ケニス1世 (Kenneth I) となった。

この時のスコット王ケニス1世の環境は、ヴァイキングの襲撃や、ピクト族との闘争、それに対する税の徴収を、実際に体験しながら育った。

71) Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland*, *op. cit.*, p. 42.

・恐怖心の1例として、ヒルベニア、現アイルランド南部のティペレアリー州 (Tipperary)、ロック=オヴ=キャッシュェル (Rock of Cashel) にコーマック礼拝堂 (Cormac's Chapel) がある。そのコーマック礼拝堂の北側のタンパン (tympanum: 入口ドアの上) に、ライオンに、ノルマン型のヘルメットをかぶった小さなケンタルウスが弓を射る絵がある。これは、ヴァイキング (ライオン) に対してケルト系のゲール人が弓矢で対抗している絵である。神聖なキリスト教の礼拝堂タンパンに、このような絵が描かれているということは、ヴァイキングの襲撃が、かなり惨たらしかったことを意味している。

・Aighleann O'Shaughnessy, Jim Lamer and Tom Wood, *Rock of Cashel*, 2003, OPW, p. 18.

・Rialtas Na hÉireann, *Carraig Phádraig, Caiseal Mumham*, 1993, OPW, p. 9.

72) James Mackay, General Editor, *Pocket Scotland History: Story of a Nation*, *op. cit.*, p. 67.

73) James Mackay, General Editor, *Pocket Scotland History: Story of a Nation*, *ibid.*, p. 67.

言い換えると、スコット王ケニス1世は、これらの危機的状態の中から、戦闘技術、戦費の調達方法を身に付けて行った。

ピクト族にとって、王位継承問題は、スコット人のダルリアダ王アルピンを処刑したことにより、一応の解決を見たが、ヴァイキング襲撃は、存続の危機的な問題であった。

ピクト族は、839年には、ヴァイキングに対する反撃を、完全に封じ込めた⁷⁴⁾。

ピクト王のコンスタンティン1世が、820年に殺害されて以来、それ以後のピクト王も、ヴァイキングに殺害された。

アルピン王の跡を受け継いだスコット王ケニス=マッカルピンが、839年に、ダルリアダ王ケニス1世 (Kenneth I) ともなった。

ヴァイキングにより、ピクト王が殺害され続けているなか、841年頃、ダルリアダ王ケニス1世は、戦闘能力に長けたおり、一時的にヴァイキングの襲撃に打ち勝った。

その勝因は、経済的安定から来る戦費の調達、小規模ながら整備された指揮命令系統が有ったからに他ならない。

このダルリアダ王ケニス1世は、父アルピン王の意思を受け継ぎ、自身もアルバ王家の王位継承権を要求し、843年に、ピクト族の同意を得て、ピクト王国すなわちアルバ王国のハイ=キング (Height King: 上王) を継承した。

大王国であるアルバ王国は、小王国のダルリアダ王ケニス1世の王位継承権要求を、何故、受け入れたのであろうか。

受け入れたのではなく、受け入れざるを得なかったのである。

当時の、ピクト族の状況は、ヴァイキングの襲撃により、アルバ王国存続の危機的問題であった。

このことから、早く脱却するためには、戦闘能力に長けたダルリアダ王ケニス1世の力を借りなければならなかった。

そこで、アルバ王国内の7州の州長官 (Mor Tuath) たちは⁷⁵⁾、ケニス1

74) David Ross, *Scotland: History of Nation*, New Edition, *op. cit.*, p. 294.

75) Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, *op. cit.*, p. 41.

世の王位継承権要求を受け入れざるをえなかったのである。

このことにより、ケニス1世は、ダルリアダ王国とアルバ王国とを同盟させ、843年に、アルバ連合王国 (the United Kingdom of Alba) を創設したのである⁷⁶⁾。

このことにより、ケニス1世は、両王国を経済的に安定させると共に、ヨリ多くの戦費が調達でき、ヴァイキングに対抗できるようになったのである。

そして、ケニス1世はストーン=オヴ=スコーン (the Stone of Scone : 運命の石) に腰かけ⁷⁷⁾、公的にキリスト教的に、スコットランド王になったのである。

VI おわりに

ケニス=マッカルピンがスコット王、そしてダルリアダ王になった時は、ヴァイキングの襲撃、ピクト族との抗争で多難な時期であった。だが、彼自身の戦闘能力を買われ、ピクト族のリーダー賛同のもと、ケニス=マッカルピンは、アルバ王国のハイ=キング (Height King : 上王) になれ、両王国の連合として、アルバ連合王国を創設することができた。その要因は、当然ヴァイキングの襲撃によるものであった。

本来であったら、ケニス=マッカルピンは、連合王国ではなく出身地国名をとり、ダルリアダ王国とすべきであったであろう。

だが、ケニス=マッカルピンは、あえてアルバ連合王国としたのである。

カレドニアにおいて、小王国のダルリアダ王国とするよりも、大王国のアルバ王国のアルバという言葉を用いたのは、古来使用されていたアルバを使用したいという気持ちと、さらにスコット人としての自分自身が、ピクト人と、団結、同盟、連合したいという気持ちが、優っていたからに他ならないのである。

76) David Ross, *Scotland: History of Nation*, New Edition, *op. cit.*, p. 50.

77) Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, *op. cit.*, p. 37.